山のことぶれ

折口信夫

一　山を訪れる人々

明ければ、去年の正月である。初春の月半ばは、信濃・三河の境山のひどい寒村のあちこちに、過したことであつた。幾すぢかの谿を行きつめた山の入りから、更に、うなじを反らして見あげる様な、岨（ソバ）の鼻などに、さう言ふ村々はあつた。殊に山陽（カゲトモ）の丘（ヲ）根（ネ）の裾を占めて散らばつた、三河側の山家は寂しかつた。峠などからふり顧（カヘ）ると、必、うしろの枯れ芝山に、ひなたと陰とをくつきり照しわける、早春の日があたつて居た。花に縁遠い日ざしも、時としては、二三の茅屋根に陽炎（カゲロフ）

をひらつかせることもあつた。気疎(ケウト)い顔に、まぢ〳〵と日を暮す、日なたぼこりの年よりの姿が、目の先に来る。其は譬喩(タトヘ)ではなかつた。豊橋や岡崎から十四五里も奥には、もう、かうした今川も徳川も長沢・大久保も知らずに、長い日なたのまどろみを続けて来た村があるのだ。

青やかな楚枝(ズハエ)に、莟の梅が色めいて来ると、知多院内の万歳が、山の向うの上国(ジヤウコク)の檀那親方を祝(ホ)き廻るついでに、かうした隠れ里へも、お初穂を稼ぎに寄つた。山坂に馴れた津島天王の神人も、馬に縁ない奥在所として択り好みをして、立ち廻らない処もあつた。

日本人を寂しがらせる為に生れて来たやうな芭蕉も、江戸を一足踏み出すと、もう大仰に人懐しがつて居る。奥州出羽の大山越えに、魄落すまでの寂寥を感じた。人生を黄昏化するが理想の鏡花外史が、孤影蕭条たる高野聖の俤をぽつゝり浮べた天生の飛驒道も、謂はゞ国と国とを繋ぐ道路の幹線である。雲端に霾（ツチフ）る、と桃青居士の誇張した岩が根道も、追ひ剝ぎの出るに値する位は、人通りもあつたのである。

鶏犬の遠音を、里あるしるしとした詩人も、実は、浮世知らずであつた。其口癖文句にも勘定に入れて居ない用途の為に、乏しい村人の喰ひ分を裾分けられた家

畜が、斗鶏（トケイ）や寝ずの番以外に、山の生活を刺戟して居た。

私は、遠州奥山の京丸を訪れた時の気分を思ひ出して見た。村から半道も、木馬路（キンマミチ）を上つて、一つ家に訪ねた故老などの、外出（ヨソデ）還りを待つ間の渋茶が促した、心のやすらひから。京丸なども、もう実は、わざ〳〵見物に行く値打はない程開けて居た。

駿・遠の二州の源遠い大河の末の、駅路と交叉したあたりには、ほんとうは大昔から山の不思議が語られて居た。武家の世渡りに落伍した非御家人（ヒゴケニン）の、平野を控へた館の生活を捨てゝからの行動が、其とてつもなく

古い伝説の実証に、挙げられる様になつて行つた。飛騨・肥後・阿波其他早耳の琵琶坊（ボサマ）も、足まめな万歳も、聴き知らぬ遠山陰の親方・子方の村が、峯谷隔てた里村の物資に憧れ出す時が来た。其は、地方の領家（リヤウケ）の勢力下から逃げこんだ家の由緒を、完全に忘れ果てゝからであつた。其昔（カミ）から持ち伝へた口立ての系図には、利仁・良文や所縁（ツガ）もない御子（ミコ）様などを、元祖と立てゝゐた。其上、平家・盛衰記を端山の村まで弾きに来る琵琶房主があつた。時には、さうした座頭の房（ボン）を、手舁き足舁き連れこんで、隠れ里に撥音を響かせて貰うたりもした。山彦も木精（コダマ）もあきれて、唯、耳を

澄してゐる。さうした山の幾夜が偲ばれる。日が過ぎて、山の土産をうんと背負はされた房様（ボサマ）が、奥山からはふり出された様な姿で山口の村へ転げ込んで、口は動かず、目は蠣の様に見つめたきりになつて居たりする。山人の好奇（モノメデ）に拐された座頭が、いつか、山の岩屋の隠れ里から、隠れ座頭がやつて来る、など言ふ話を生んだのであらう。

さうした出来心から降つて湧いた歴史知識が、村の伝へに元祖と言ふ御子様や、何大将軍（ダイシヤウグン）とかもすれば、何天子や某の宮、其おつきの都の御大身であつたかと、村の系図の通称や官名ばかりの人々のほんとうの名が

知れて、山の歴史はまともに明りを受けた。焼畑（コバ）や岩地（ソネ）うつたつきも、張り合ひがついて来る。盲僧の軍記語りの筋は、山にも里にも縁のなくなつたずつとの昔の、とつとの遠国（ヲンゴク）の事実と聞きとる習慣があつたのなら、かうした事は日本国中の山家と言ふ山家に起る筈がなかつたのである。

日本の国のまだ出来ぬ村々の君々の時代から、歴史物語は、神だけに語る資格が考へられてゐた。神が現れて、自身には人の口を託（カ）りて語り出す叙事詩（モノガタリ）は、必その村その国の歴史と信じられて来た。国々の語部（カタリベ）の昔から、国邑の神人の淪落して、祝言職（ホカヒ）となり、陰陽師（オンミヤウジ）

の配下となつて、唱門師（ショモジン）・千秋万歳（センズマンザイ）・猿楽の類になり降つても、其筋がゝつた物語は、神の口移しの歴史で、今語られてゐる土地の歴史と言ふ考へ方は、忘れられきつては居なかつた。盲僧や盲女（ゴゼ）の、神寄せの後に語り出す問はず語りの文句も、さうした心持ちから受け入れられたのである。京・鎌倉の公家・武家の物語も、結局は、山在所の由来として聴かれたのも道理である。だから此入訣（イリワケ）も呑み込まないで、むやみと奥在所の由緒書きを、故意から出た山人のほら話と、きめてかゝつてはならないのである。

二　常世神迎へ

こんな話は、山家ばかりで言ふ事ではなかつた。京一巡(ジユン)、「梯子や打ち盤」触り売つて戻つても、まだ冬の薄日の残つて居る郊外の村に居ながら、「昔は源氏の武士の目をよけて」と隠れ住んだ貴人の、膚濃やかに、力業に堪へなんだ俤を説く、歯つ欠け婆ばかりの出て来る在所さへある。だから、非御家人としての冷遇に居たゝまらずなつた前からあつた、若い御子と其後見衆(オトナシユ)を始めとする系図は、実は、日本一円の古い村々に、持ち伝へられた所の草分けの歴史であつたと言へ

る。

若く弱(アエ)かな神が、遥かな神の都からさすらうて村に来た。其を斎うたのが村の賓客の初めで、旅にやつれた御子をいたはつたのが、元は村の神主で、村の親方の家の先祖と説く神話が、前の様な歴史を語らぬ、一方の村々に行はれてゐる。恐らく今三四百年も以前には、此を語らぬ村とては、禁裡・幕府のお蔭も知らぬ山家・海隈に到るまで、六十余州の中にはなかつたであらう。此は日本国の元祖の村々が、海岸に篷屋(トマ)を連ねた大昔からあつた神の故事である。幼い神が海のかなたの常世の国から、うつかり紛れて、此土に漂ひ寄る。此を

拾ひあげた人の娘が育（ハグク）みあげて、成人させて後、其嫁となつて生んだのが、村の元祖で、若い神には御子であり、常世の母神（オヤガミ）には御孫（ミマ）の御子だと考へられた。さうした伝へが村々に伝へられて居る中に、色々に変化して行つた。旅の疲れで死んだとも言ふ。村の創立後遥かの後の事実で、村の大家のある代の主人に拾はれて、其家に今の様な富みを与へて後、棄てられたとも言うてゐる。此若い男御子が、処女神に替つて居る処もあつた。平野で止つた村には、野に適（フサ）はしい変化が伴ひ、山の盆地に国を構へた地方では、山の臭ひをこめた物語に変つて行つた。常世の若神を懐き守りした

娘の話が、山国に限つては、きつと忘れられなかつたばかりでない。言ひ合した様に、殆ど永久と言ふ程生きてゐた姥御前（ウバゴゼ）の白髪姿に変つて居た。此だけが、海の村と山の村との、生活様式から来た信仰の変化を語るものである。

常世の国からは、ゆくりなく流れ寄る若神の外に、毎年きまつて来る神及び其一行があつた。初めは初春だけ、後に至る程臨時の訪れの数が増した。其来臨の稀なるが故に、此をまれびとと称へてゐた。此神の一行こそ、わりこんで村を占めた、其土地の先住者なる精霊たちの悩まし・嫉みから、村を救うてくれる唯一の

救ひ主であつた。
此常世神の一行が、春毎の遠世浪(トコヨナミ)に揺られて、村々に訪れて、村を囲む庶物の精霊を圧へ、村の平安の誓約(ウケヒ)をさせて行つた記憶が、山国に移ると変つて来た。常世神に圧へ鎮められる精霊は、多くは、野の精霊(スダマ)・山の精霊(コダマ)であつた。其代表者として山の精霊が考へられ、後に、山の神と称せられた。山の神と常世神とが行き値うての争ひや誓ひの神事演劇(ワザヲギ)が初春毎に行はれた。村の守り神が其時する事は、呪言を唱へることであり、村の土地・家々の屋敷を踏み鎮めることであつた。さうしてわざをぎをするのが、劫初から恐らく罔極の後

へかけて行はれるものとの予期で、繰り返された村の春の年中行事であつた。

青垣山にとり囲まれた平原などに、村国を構へる様になると、常世神の記憶は次第に薄れて行つて、此に替るものが亡くなつた。さうして山の神が次第に尊ばれて来て、常世神の性格が授けられて来る。常世及び其神の純な部分からは、高天原並びに其処に住む天つ神の考へが出て来た。村人と交渉深い春の初めの祝福と土地鎮め、村君・国主の健康を寿ぐ方面の為事は、山の神が替つてすることになつた。つまり山の神と村人との間の感情が、以前よりは、申し合せのつきさうな

理会ある程度まで、柔らいで来たのだ。村の生活を基礎とした国の生活、其中心なる宮廷、古く溯る程、神を迎へ神を祭る場所と言ふ義の明らかに見える祭りの場所（ニハ）としての宮廷にも、春の訪れに来向ふ者は、常世神でなく、山の神となつた。初春ばかりか、宮廷の祭り日や、祓への日などには、きつと、かはたれ時の御門（ミカド）におとなひの響きを立てた。村々の社々にも、やはり時々、山の神が祭りの中心となつて、呪言を唱へ、反閇（ヘンバイ）を踏み、わざをぎの振り事、即神遊びを勤めに来た。

さうした祭り日に、神を待ち迎へる、村の娘の寄り合

うて、神を接待(イツ)く場所(ニハ)が用意せられた。神の接待場(イチニハ)だから、いちと言はれて、こゝに日本の市の起原は開かれた。山の神は、勿論、里の成年戒を受けた後の浄い若者の扮装(ヤツシ)姿であつた。常世神がさうであつた様に。後、漸く山の主神に仕へる処女を定めて、一人野山に別居させる様になつて、野ノ宮(ノミヤ)の起りとなつた。山の神に仕へる巫女が、野ノ宮に居て、祭り日には神に代つて来る様にもなつた。山の神は里の神人の一時の仮装ではあるが、山の神の信仰が高まつて、山の主神の為に、山の嫁御寮(ヨメゴリヨ)が進められたのである。

祭り日の市場(イチ)には、村人たちは沢山の供へ物を用意し

て、山の神の群行或は山姥の里降りを待ち構へた。山の神・山姥の舞踊の採り物や、身につけたかづら・かざしが、神上げの際には分けられた。此を乞ひ取る人が争うて交換を願ふ為に、供へ物に善美を尽す様になつた。此山の土産は祝福せられた物の標であつて、山人の山づとは此である。此が、歌垣が市場で行はれ、市が物を交易する場所となつて行く由来である。さうして、山人・山姥が里の市日に来て、無言で物を求めて去つた、と言ふ伝説の源でもある。其時の山づとを我勝ちに奪ひ合ふ風が、後のうそかへ神事などの根柢をなしてゐ、又、祭りの舞人の花笠などを剝ぎ取る風

をも生み出したのである。

山づとは何なに。山の蔓草や羊歯の葉の山縵（ヤマカヅラ）や、「あしびきの山の木梢（コヌレ）」から取つたといふ寄生木（ホヨ）の頭飾（カザシ）や、山の立ち木の皮を剝いで削り掛けた造り花などであつた。かうして易（カ）へられた山づとは、初春の家の門や、家内に懸けられた。牀柱には山かづら、戸口や調度に到るまで、山へ行つた様に見せる山草、軒に削り掛け、座敷に垂す繭玉・餅花・若木（ワカギ）の作枝（ツクリエダ）が、古くして新しい年の始めの喜びを衝昂（コミア）げて来るのも、其因縁が久しいのだ。

此三州の山家の門松は、東京などのとは違つて居た。

さう言へば、歳神なども常世神や先祖のみ霊に近づいた考へで、祀られて居た。さう云ふ話に這入らない中に、春の初めの此「言（イ）ひ立（タ）て」も、めでたく申しをさめねばならなくなつた。「たう〳〵たらり」長々しいことを何より先にする言祝（コトホ）ぎの言ひ癖が出たと思うて、読者に於ても、初笑ひを催して頂きませう。

底本：「折口信夫全集　2」中央公論社
1995（平成7）年3月10日初版発行
底本の親本：「古代研究　民俗学篇第二」大岡山書店
1929（昭和4）年4月10日発行
初出：「改造　第九巻第一号」
1927（昭和2）年1月
※底本の題名の下に書かれている「昭和二年一月「改造」第九巻第一号」はファイル末の「初出」欄に移しました。
※訓点送り仮名は、底本では、本文中に小書き右寄せになっています。

入力：小林繁雄
校正：多羅尾伴内
２００３年12月27日作成
２００４年１月25日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。